

男女がエッチし放
題 周遊列車の旅
その後は海へ 男
女夏物語

カンカンカーーーンツツ！！！！

踏切が鳴る。山道の脇。

汽車がレールを走っている。

列車内には紫と白の縞（しま）地の絨毯
（じゅうたん）。

落ちついた空間である。

とあるビルの最上階でも

その列車に乗るための入り口チケット
は販売されている。

例えば高級バーで何年も働く美人ママは、そのチケットを購入した。

あるいは別の場所では若いOL。

20代。

その多くは知人の伝（つ）て、である。

知人は知っていたのだ。

「黒い汽車は暗い山道を走る。どこまでも行くように見えて、俯瞰して見ればあ

る程度の距離のある山間を回っている
だけだ」

知人は付け加えた。

「・・・・・・・・その汽車には移動の目的
はないんだ。・・・・・・・・ひたすらエ
ッチなことをするための汽車さ」

列車はどこまでも走る。

ピンク色の霧の中を。

その列車内大乱交の様子は

例えば巨大な山の麓の空き地のスクリーンに映し出される。

それに引き換えとして

列車に乗るのは

言わばセックスの超エリートである。

夜な夜な性を営み、

それは例えば激しく性に特化したカラダを持った熟練の女たちばかり。

男たちももちろん巨根である。

・・・というより列車内でそうなる、成長すると言った方がいいかもしれない。

セックスのためだけに体がある。

脇を上げてみる。

そこにはツルツルの無毛の脇。

そしてペニスの周りにも毛は生えそろ
っていない。

男たちはギロツと

隣にいる女を見た。

「あなたの太ももは美味しそうだね」

自由とは難しいものである。

しかしここは狭い狭い列車の中。

車窓は常に移ろい

自由の意味が分かりやすい・・・・。

何よりも女体が男体が

そこら中にあるのである。

絨毯（じゅうたん）の上を

マットレスの上を

這いつくばるようにお尻を突き出し男
たちに舐めすすってもらう女たち。

山間は緑が多く近くには観光名所も多
い。

しかし通り過ぎる車窓には目をやらない乗客たち。

リミハという32歳の女性は、いつものこの列車のパートナーである男性とシックスナインをしながら

眩いていた。

「毎晩の旦那との朝までのセックスで腰を少し痛めちゃって……」

……近くの整形外科クリニック通いの日々よ。

そう言いながらもリミハの赤い口紅を落としたばかりの唇には男性の巨大な

巨大なペニスの先端がぼっくりと絡み
ついている。

れっきとしたこの列車への参加者であ
る。

通りすぎる景色。

ずっとずっとしゃぶっていた。

「・・・・・・・・景色・・・・・・・・すっごくキレイ」

横ではマットレスの上で

サナエという女性と今度は少しまだ若い男性が

アナルセックス。

お尻の穴にも慣れてきたサナエである。

ずっとずっと列車は走り続けている。

一方で相手の男性は若い。

先日、学校の屋上で童貞を卒業したばかり。

相手は学校の新入り保健の先生。

初めて知った女性。

彼女のヴァギナはとっても締めつけが
強くて温かかった。

彼はサナエさんのアナルを舐め楽しむ。

(体験版は以上になります。ご読了ありがとうございました)